

研究発表 アリストテレス哲学における『政治学』の位置付け —その執筆の哲学的意図を理解するために—

榊 原 健太郎

【第一章】 本論への予備的考察

古今より、哲学的諸問題が論究される文脈にあって、つねに吟味されていなければならない重大な事柄のひとつに、論究対象の正確な設定と、その論究対象に与えられるはずの論究言語の正確な設定というものがある。というのは、たとえば医学が対象とするものを見出せたのであれば、それにふさわしい固有な医学言語とでもいうべきものが招来されるであろうし、また、一方で論理学の論理学ゆえの問題群に対して化学領域の言語をもってその解答にあてるといったようなことはできない、という意味においてである。そして、このことを哲学論述の実際において、自覚的、徹底的に現実化した人物として第一に挙げられるべきはアリストテレスである。事実、彼は哲学議論のオルガノン（道具・器官）としての論理学を端緒に、知の局面として三区区分した理論学・実践学・制作学について、それぞれの学の対象の性格をよく理解し、よく論じた。しかし、一方でかれは、これら諸学相互の（あるいは、さらに内分化された学問相互の）距離、緊張関係、そして各学問が対象とする「対象」そのものの存在論的実体性を根拠にした優劣上下関係等、を明晰にすることに執拗であった。そしてまた、この執拗さの成果が全アリストテレス哲学の解明を試みんとする者に、甘い果実とならないわけでもなかった。

さて、上記の概略を踏まえたうえで、本稿で取り扱うのは『政治学（*Politica*）』である。そして本稿で目指すものは、アリストテレス哲学における『政治学』の位置付けである。周知のように、『政治学』は『ニコマコス倫理学（*Ethica Nichomachea*）』、その他倫理学書と合わせて、実践学の部門を担当する。そして、そこでは『政治学』の一部門として『ニコマコス倫理学』が与えられているという位置関係も、見逃せない事実である。『ニコマコス倫理学』が探究の中心問題としたのは、誰もが容易に関心を抱きうる個人レベルでのこころ／魂（*psyche*）の働きであった。だが、それををもさらに大きく包み込む『政治学』の正体とは何なのか。さらには、アリストテレス哲学の全体において「完成学、統括学」（*EN*1.2）とされる『政治学』のもつ実力とは何なのか。そもそも、人間（*anthoropos*）のどのような関心に応えようとするものなのか。

『政治学』にはアリストテレスが「人間」について規定した、「人間は社会的（ポリスに生きる）動物である」（*Pol.* 1,1253a2-3/7-18;3,1278b15-30;*EE*. 7,1242a19-28;*EN*. 8,1162a16-19;9,1169b16-22）という有名な一節があることはよく知られている。しかし、これについての解釈と理解においては問題が多い。社会学や文化人類学をはじめ、その他の領域で引

用される事例は限らないが、きわめて表層的で一面的な解釈に基づく利用である。つまり、この一節ほどアリストテレスの著作において彼の真意からはずれ、その文脈から切り離されて理解されているテキストも他にはない、と言ってもよい。この事態を打開するためには、この一節をもう一度アリストテレスの哲学的文脈に引き戻し、その上で、そこに込められている哲学的インプリケーションを汲み取り直すしかないだろう。

そこで、以上の一連の問題に答えるべく本稿が検討するテキストは、下記の個所である。

この個所は、『政治学』の冒頭第一巻第二章にあたる。この個所は、アリストテレスが自らが構想する政治学研究について基本的な方向を打ち出している個所であり、著作の全体的性格から見てもきわめて重要な個所である。以下、その個所を書き記す。

(…)なるほど、国 (polis) は生きるために生じてくるのではあるが、しかし、善く生きるために在る。第一の共同体 (koinonia) [家 (oikia) や村 (kome)] が自然にある以上は、すべての国 (polis) は自然にある。¹ というのも国はそれらの共同体の完成 (telos) であり、自然 (physis) が完成であるからである。というのも、それぞれのものが生成 (genesis) の完成状態にあるときに、それをわれわれはそのもの、たとえば人 (anthoropos) や馬 (hippos) や家 (oikia) の自然であると言うからである。さらには、そのためのそれ (to hou heneka)、つまり完成はまた最善のものである。しかるに自足 (autarkeia) が完成であり最上のものである。かくして、国が自然的なものに属する (ton physei) こと、² また人間 (ho anthoropos) は、自然本性的に (physei) ポリスに生きる動物 (zoon politikon) であるということは、明らかなことである。そして、偶然によってではなく、自然によって (dia physin) 国をなさないものは劣悪なものであるか、人間よりも優れたものである。(…) ³ ところで人間 (ho anthoropos) は、蜂の全てよりも、また群棲動物のどれよりもポリスに生きる動物 (zoon politikon) であるということは明らかなことである。なぜならば、われわれが主張するように自然 (physis) は何ごととも無駄につくりはしないのに、人間 (anthoropos) だけが動物のうちで (ton zoon) 言葉 (logos) をもっているからである。声 (phone) を出すだけならば快と苦を表す徴だから、他の動物にもできることなのである。(1252b29-1253a12)

さて、以上のテキストを基礎にして、以下では、第二章で「統括学」としての『政治学』の位置付けを明らかにし、続く第三章では人間の「最高善」を求める学としての位置付けを考える。この二つの異なった側面から『政治学』の位置付けについてアプローチし、『政治学』執筆構想に盛り込まれた哲学的意図を明らかにする試みの一端としたい。

【第二章】「統括学」としての『政治学』の位置付け

この章で明らかにしたいことは、アリストテレス全著作史の流れの中で『政治学』のテキストのもつ「統括学 (architektonike episteme)」としてのテキスト性である。政治学、政治の知が統括学であり、ひとつの「専門知識 (episteme)」であること⁽¹⁾は、『ニコマコス倫

理学』の冒頭で「もっとも統括的な専門知識の扱うものは、明らかに、政治術 (politike episteme) である。というのは、政治術はどのような専門知識がポリスにおいて求められるべきであり、各種のひとつとがどのような専門知識を、どの点まで学ぶべきであるかを指定するからである (EN 1,1094a26-1094b2)」と、明言されている通りである。政治の専門知識とは、いかに国を治めるかということに懸っていると言っていいだろう。ここで確認しなければならないことは、政治学が、政治以外の専門知識、すなわち、生物学の専門知識、医学の専門知識、建築学の専門知識といったものと同様な意味で、ある一つの専門知識であるということである。そして、この「専門知識 (episteme)」は、アリストテレス哲学の基本的な枠組みにおいては、「技術 (techne)」と結び付けられる。さらに「技術」は、その「技術」によって生み出された「技術制作品 (ergon)」との対比において、いわゆる四原因論の文脈を前提としている。

さて、本稿で引用した『政治学』のテキストは、国の「生成 (genesis)」の原因を、「男性・オス (arren)」と「女性・メス (thely)」という始源的な組合せにまで遡源して究明し、論じてきた結果の結論部分にあたる箇所からの引用である。しかし、この箇所について論じる前に、われわれは、今、アリストテレス哲学におけるひとつの重要な説明原理である四原因論を理解し、念頭に置いておかなければならない。四原因論とは、すなわち、「質量因 (hyle)」, 「形相因 (eidos)」, 「始動因 (kinoun)」, 「目的因 (to hou heneka)」という原因の4つのタイプをもとに、存在事物の「存在 (cinai)」と「生成 (genesis)」を説明するものである。たとえば、技術制作品について言えば、彫像についての「質量因」は彫像における石材、青銅であり、「形相因」は彫像における「ヘルメス」「アポロン」というような神の形であり、「始動因」は彫像における彫像師、たとえばポリュクレイトス、「目的因」は、彫像の制作においては、彫像師の働きを引き起こす「ヘルメス」「アポロン」の完成の形の美しさがこれである。また別に、自然物の場合には、「形相因」はそれぞれの生物体、たとえば人間については、人間の生成を限定している「種」を成す形相である人間の本質・自然 (physis) であり、「質量因」はそれぞれの生物体の身体の構成要素である物質 (人間の場合は、女性の月経血により代表される) であり、「始動因」はこの生成を引き起こすもの、人間の場合は父親、または男性の精子、「目的因」は人間の完成体である。

さて、われわれは、ここで『政治学』のテキストに戻り、傍線 1 (p.40参照) の箇所を検討することにしよう。ここで言われていることは、国は共同体にとっての完成状態であり、この完成状態とは、それ以上の完成はないという意味での自然 (physis) である。国家の生成を説明するパラダイムの一つのヴァージョンを目指しているこの箇所までの論述からして、この結論は当然であり、同時に説得的である。しかし、ここで注目したいのは、むしろ、ポリスの生成のパラダイムを論じている『政治学』のテキスト上において、別種別次

(1)このことは、政治の「専門知識」をもたずに、ただなんとなく政治のことに口出しするようなあり方とは、全く区別されなければならない。このあたりのことについては、松居正俊 (「デモクラシーのために」弘前大学哲学会編『哲学会誌』第XX X号, 1995) の考察が大変参考になる。

元の事物の生成のパラダイムをそこに意図的に刻印しているということ、つまり、国が完成状態を目指し「生成」するその生成のプロセスと、「人間」、「馬」、「家」という、国とはまた別の完成状態を目指し「生成」する存在事物を、『政治学』のテキストの上にさりげなく並置しているという点である。ここに、アリストテレスの『政治学』構想における彼一流の戦略を読みとることができるのではないだろうか。アリストテレスの哲学的意図がここにある。否、彼にとってはむしろ自明なことだったのかもしれない。つまり、こうした全哲学領域に互る一貫性がアリストテレスの視点であり、われわれの『政治学』研究には、こうした視点を前提とした読み筋が欠かせないのではないだろうか。

さて、この章では、『政治学』のテキストにその他の全著作史的な研究の流れの中で得られた知見が流れ込む様を見ることで、『政治学』という学問領域が持つ論究言語の「統括的」な性格が明らかになった。そして、必然、『政治学』の論究対象とは、この世界のありとあらゆる存在事物が、そこで自らの完成 (telos) を目指してひしめき合っている場面としての国 (polis) そのものである。

【第三章】 人間の「最高善」を求める学問としての『政治学』の位置付け

われわれが、政治ということを問題の中心事項として議論する場合に、よく持ち出される問題として、「国家と個人」という問題がある。そして、きわめて古代的な考え方と称され「個人は国家のためにある」と言われたり、一方で、近代国家システムの枠組みにおいては、「個人のために国家はある」と言われたりする。確かに、アリストテレスは、『政治学』のある個所において、「国家は個人に先立ち、個人は国家の部分である」という主旨のことを言っているが (Pol. 1,1253a19-29)、それは、国家についての哲学的分析の一つの手法として言っているのであって、このことを先のような安直で図式的な「国家—個人」理解を促すために言っているのではないし、『政治学』の構想はそこにあるのではない。さて、こうした「国家—個人」という比に基づく上記の問題は、一般に、人間の最善の生き方とはいったい「国家ないし社会に生きる」ことなのか、「個人的に、私的に生きる」ことなのかという、哲学をはじめ、その他、社会学・政治学・文化人類学・法学といった諸学問あるいは文学などにおいて問題とされる難問と重なる。この難問とはどういう問題なのか。この難問について、ひとはよく、矛盾であり、ジレンマだと言う。ほんとうに矛盾なのか、ジレンマなのか。

では、この難問をアリストテレスの文脈に置き換えてみよう。アリストテレスにとって、人間における「最高善 (to ariston)」とは、「観想活動 (energeia theoretike)」であり、これが第一義の「幸福 (eudaimonia)」である (EN. I 2;X6,7,8)。これに関しては、『ニコマコス倫理学』において詳細に論じられたが、上述のような構図が、やはりアリストテレス哲学にも見て取れる。すなわち、一方で『ニコマコス倫理学』において主題的に論じられた「観想活動」の生があり、またもう一方では『政治学』において宣言される「社会的 (ポリスに生きる)」生がある、という構図である。この両者の関係について、アリストテレスはどのように考えていたのだろうか。この問題を本稿では最後に論じることしたい。

そこで、この問題に対する解答の基本的な方向として、アリストテレスはこの両者、すなわち「観想活動」の生—「国（ポリス）に生きる」生が同時成立しているような「人間の生」のモデルを想定しているのではないか、という読みの立場を提示してみたい。ただ、より厳密に言えば、「国（ポリス）に生きる」生が成立しない人間に、「観想活動」の生は成立しないという意味におけるそれである。それは例えば、国的・ポリスの事柄からはっきりと切り離されて「自分の世界に閉じこもって得られるある種の快楽」も、「隠遁生活を送ること」も、また「象牙の塔に籠もること」も、アリストテレスの視点からすれば「【擬似】観想活動」であって、「観想活動」ですらない、ということである。以下、アリストテレスの『政治学』の文脈がこの読み筋で解釈できる根拠を明示したい。

まずはじめに、われわれは、きわめて自明な事柄を確認することができる。そもそもの定義からして「政治学が知るものは最高善（EN. I 2）」であった。そして、もちろん人間にとっての「最高善」は「観想活動」（EN. X 7）である。当然の帰結として、「政治学」は「観想活動」を扱う。つまり、「観想活動」は「政治学」の延長線上の最先端にある。従って、「政治学」のテキスト上には「観想活動」が鮮明に浮かび上がっていないなければならない、という「政治学」テキストが孕む大前提が導出できる。この前提は強く認識すべきである。『ニコマコス倫理学』が、「個人レヴェル」の魂（psyche）に即した仕方では人間の生について論じていることに引きずられて、この当たり前の前提が見過ごされがちである。いや、『ニコマコス倫理学』の論究が、「個人レヴェル」であると断定してしまうことが既に危ういことなのかもしれない。そもそも、『ニコマコス倫理学』の「個人」と『政治学』での国家に生きる「個人」は、端的な意味で「別物（べつもの）」なのだろうか。否、そうではなく、両者はあたかも裏表のあるコインのごとく、そもそもにおいては一体のものなのではないか。しかし、この点については、ここではこれ以上論じ切れない。引き続いて『政治学』の引用の傍線2（p.40参照）を検討したい。

「人間は自然本性上、国に生きる動物である」。有名な一節である。果たしてどのような意味で言われているのか。まず、直前の一文を正確に理解したい。国は、その目的を実現した完成状態であるという意味で、国のあるべき姿、そのためのそれ（形相）を実現していると言え、その点で国は一つの自然であり、形相であり、実体である。この一文で言われている自然とは、文脈上、『形而上学』（V.4, 1015a-11）哲学用語定義集における「自然（physis）」の一定義としての「形相（eidos）」「実体（ousia）」の意として哲学的緊張感の強まった一語である。そして懸案の一筋は、この哲学的緊張感をそのまま受け継ぐ。完成形態、形相として指定された国には、完成形態、形相として指定される人間が対応する。すなわち、人間は国に生きる動物である時、人間のあるべき姿としての形相が実現され、維持確保されている。国に生きる人間の条件は、人間のあるべき姿としての形相をクリアしていなければならない、と、この一節の要求するところは厳しい。そして、この一筋と同位同格の哲学的含蓄を有する一文として、われわれは傍線3（p.40参照）を注視しなければならない。すなわち、「人間だけが動物のうちで言葉をもつ（logon echein）動物である」。この一文と先の「人間は自然本性上、国に生きる動物である」という一文は二文一組で対

を成し、補い合い、『政治学』の文脈における人間理性の全体性と開示性を保証する。それは、つまり、ロゴス（言葉・理性）は人間の政治性、国（ポリス）性を喚起し、国は人間に、いかなる意味にあっても、国において、国的場面において、そのロゴスを放射、開示することを希求しているものとして恒に在る。そして、「国に生きる（*zoon politikon*）—言葉・理性を持つ（*logon echein*）」という人間本質の基本原理は、政治的行為者の人間を「実際に善いひととなること（*EN. II 2*）」へと方向付ける。さらに最後に、人間は、この構造をその内側に抱えながら観想活動を現実にする存在である。そして、これは、人間以外の為せる活動ではない。「他の動物はどれもみな幸福ではない。なぜならば彼らはまったく観想活動にあずからないから（*EN. X 8*）」である。

【結び】

アリストテレス哲学における『政治学』の研究は、日本をはじめ欧米諸国においても、いまだその緒についたばかりであり、本格的な研究はこれからといった状況である。本稿での試論が『政治学』研究の議論を高めていくための一端を担えていたとすれば、論者にとって幸いである。

（弘前大学大学院修士課程在籍）